

表 16 再捕されたタイワンガザミの大きさと移動距離

甲幅 mm \ 距離 km	~0.5	~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	3.0~	不明	計
100~110				1					1
~120		1					1(5.5~6.0)		2
~130									0
~140	2		1	1					4
~150		3	2			1	1(21.0~21.5)		7
~160	1	6	1	2		1	1(19.5~20.0)		12
~170				3	1			1	5
~180				1					1
不明				1			2(10.0~14.0)		3
計	3	10	4	9	1	2	5	1	35

ものは、勝連半島南側で34日目、中城沖で41日以上、知名崎沖で42~51日目、西原沖で87日目に再捕されており、1ヶ月以上経過して放流海域から勝連半島を回って中城湾へ入り、さらに中城湾を南下したと考えられる(表14, 図20)。中城湾内で再捕された放流ガニは5尾で総再捕数の14.3%を占め、与勝海域(勝連半島東側、浜比嘉島、平安座島、宮城島周辺海域)で漁獲されるタイワンガザミは、中城湾域のものかなり交流があると予想される。

放流後の経過数と移動距離をみると、与勝海域では放流直後から再捕され、放流後48日目にB放流群が放流点から0.5~1.0kmのところまで再捕されたのを最後にそれ以降再捕されなくなったのに対し、中城湾域へ移動したものは放流後34~87日の間に再捕されている(表14)。この結果をそのまま素直に解釈すれば、時間の経過とともに分散、移動したととらえられるが、1ヶ月経過した頃の再捕個体の標識番号はやや薄れていたという報告があり今回使用した標識の有効期間に疑問が残るので、どの程度放流地点付近に留まっているかは今後の調査を待たなければならない。

またタイワンガザミの大きさによって移動の様式が異なるかを検討したが、大型個体ばかりでなく甲幅117.7mmの当オガニも放流点から勝連半島を回って中城湾へ入り込んでいたり、甲幅の違いによる移動距離の差もみられない(表16)など大きさによる相異がないようだった。しかし再捕例がまだ少ないのでこれも今後の検討課題である。

今回の再捕報告は1例を除いて全て10m以浅で刺網により漁獲されたもので、深淺移動を示すような情報は得られていない。

IX 漁業実態

1 方法

全県のカニ類漁獲量は沖縄開発庁沖縄総合事務局農林水産部(1982, 1983, 1984)により、放